

中学校音楽科鑑賞領域における感受に基づく批評のあり方

栃本 卓摩 教職基盤形成コース 教科授業力高度化プログラム

キーワード：初感 知覚 感受 批評文

1. 問題意識, 研究の目的と方法

大学3年次の教育実習においてベートーヴェン作曲「交響曲第5番『運命』」の授業を行った。その際に曲に出会う場面で「リズムに着目してみよう」などの声かけにより教師が強制的に音楽を形づくっている要素(以下「要素」とする)に着目させ、知覚優先の授業をしてしまったことで、生徒の初感や言葉による表現の仕方に制限をかけてしまったのではないかという反省が残った。また、教職大学院の授業参観(鑑賞領域)において、曲を聴いて感じたことをワークシートに記入し共有する場面で、自らの言葉で表現できず友の発言をワークシートにそのまま記入する姿にも出会った。友の発言が生徒の感覚に当てはまったのか定かではないが、自らの言葉で表現してほしいと思った。このような経験から感受に基づく批評はどうあるべきか考えるようになった。平成29年度版中学校学習指導要領解説(音楽編)では、「音楽のよさや美しさなどについて、言葉で表現し、他者と伝え合い、論じ合うことが音楽科における批評である」とされている。しかし、本実践では「批評文」と伝えたときに生徒が難しいイメージをもつと考えたため、「紹介文」とした。自身が初めて曲を聴いて感じたことが取り組みの中で、抛り所の一部としてあり続けていた経験もあり、知覚・感受を関連させ、自らの言葉で表現する活動をする前段階として、しっかりと初感をもつことがその後の活動に大きな意味をもたらすのではないかと考えた。そこで、本研究では、以下の2点のあり方について実践を通して考察をすることを目的とする。

- ①生徒一人一人が初感を充実させるための活動のあり方とその効果
- ②知覚と感受の関わりを追究し、それらの関わりをもとに曲に対するイメージや感受を深め、自らの言葉で表現するための教師の支援のあり方とその効果

2. 実践1：ヴェルディ作曲 歌劇「アイダ」の鑑賞の授業

2.1 実践1の概要と生徒の姿

実践1においては「アイダ」を題材とした。この題材では、①生徒が初感をしっかりともち②感受と「要素」の関わりを追究することを目標に実践した。

①については、生徒の歌劇に対する興味・関心を引き出すために、有名な「凱進行進曲」を導入で扱い、歌劇のストーリーを伝えた。場面を4つに分け、場面ごとに感じたことをワークシートに記述していく授業を行った。「アイダに捧げている感じ」「つらい」というように登場人物に思いを寄せた初感だけでなく、「派手, 明るい」というように音楽の特

徴からも初感をもつ姿も見られた。

②については、自ら追究したい場面を選び、同じ場面を選んだ生徒同士のグループワークで追究するように促した。これは、同じ曲を聴いても感じ方や記述の仕方に違いがあり、着目する「要素」が様々であるだろうと想定したからである。「要素」を中心に追究をするために、「思いを表現するためにどのような声色で表現しているだろう」などと問いかけた。グループワークで「静かで高い鋭い声、声が小さいけど強い」というように声色に着目した追究をしたことで、初感では「つらい」と記述した生徒が、「最後のほうで声が小さくなっている、けど弱々しくない。金管に比べると元気っぽさがない。より悲しさを表現していると思った」というように、歌声や楽器の特徴を根拠に自分の初感と関わらせている記述を見ることができた。

2.2 実践1の成果

(1) 生徒の音楽を聴く視点が多様であることに気づかされた。

実践を行うまでは、観点をもたずに音楽を聴けば、「要素」に注目した知覚の側面からの記述や発言をする生徒はいないと考えていた。しかし、実際には「ディズニーみたい」という音楽の雰囲気から感じたことだけではなく「強弱がすごい、ビブラートがすごい」というように歌い方に注目した記述を見ることができた。このことから、教師が観点を与えなくても感受の側面だけでなく、知覚の側面からも初感をもつことがわかった。

(2) 自らの考えと、友の多様な価値観に共通点を見いだすことで考えが具体的になった。

グループワークによって、歌声や楽器の特徴を根拠に自分の初感と関わらせて考えていく生徒の姿を見ることができた。これは、「つらい」と感じていた生徒が、声に着目した友の考えに共感し、声色を根拠に知覚と感受がつながったからこのように考えを深めていったのではないかと考える。知覚・感受の異なる側面から追究が始まった生徒同士の関わりによって知覚と感受がつながるグループワークの有用性が見えてきた。

2.3 実践1の課題

(1) 感受に基づく批評を行うためには題材の選定が大切であることを考えさせられた。

今回は実践校の進度の関係で歌劇を題材とした。歌劇には、「要素」以外にも、表情やしぐさ、ストーリーなど様々な要素が関わってくる。生徒がストーリーや人物に思いを寄せたことで、感受の側面は充実した記述が多く見られた。一方で、初感と「要素」の関わりを追究した際に、感受の側面を強く意識した結果、生徒が知覚することのできた「要素」の数は平均で1.62個であり、ワークシートに「要素」に対する記述のない生徒もいた。感受に基づく批評を行うためには、題材の選定も大切であることが見えてきた。

(2) 生徒の感受したことに根拠をもたせるための支援が足りなかった。

感受と「要素」の関わりを追究した際に「アイダに捧げる様な、優しい、きれいな感じ」というようにどの「要素」について記述しているのか不明瞭なものもあった。これは「要素」を意識することができるように、実際に「要素」を用いた記述を例示したり、仲間指導で、根拠のある記述を紹介し、友の記述の良さを実感する機会を設けなかったりし

たなど、感受したことに根拠をもたせるための支援が足りなかったことが原因だと考える。

3. 実践2：プロコフィエフ作曲「悪魔的暗示」サン＝サーンス作曲「水族館」ショパン作曲「プレリュードより第4番」を題材とした鑑賞の授業

3.1 実践2の概要と生徒の実際

実践2においては、実践1の反省から題材は音源のみとした。この題材では、①生徒一人一人が初感をもつこと②感受と「要素」の関わりを追究すること③感受と「要素」の関わりについて、追究してきたことをもとに「紹介文」を書くことを目標に実践した。

①については、曲を聴く際には静かに聴くように促し、音源の音量、誰の演奏を用いるか、録音の音質などにこだわることで、分析的に聴くのではなく、生徒が自由な初感をもったり、静かで響きのある環境で音楽を聴いたりすることができるようにした。生徒の初感には、「ピアノのメロディーきれい」「不思議な世界観で、迷い込んでいるような感じ」「何かがおそってくる感じ→必死に逃げている→大丈夫かな？→追いかけてくる」というようにピアノの旋律に注目したものや物語調、線等での記述など多様なものが見られた。また、ワークシートに未記述の生徒は一人もいなかった。

②については、実践1の成果でもあるグループワークを取り入れ、同じ曲を選んだ生徒同士で追究する場を設定した。実践1の課題から、ワークシートに「要素」のうち旋律（メロディー）、強弱、速度、音色、リズムの5つを記載し、「実際に「専門用語」（「要素」）を用いて書いてみよう」と声かけを行った。生徒の記述には「寂しさ」について「速度と旋律」を根拠に「調が短調で、速度がゆっくりだから、さらに悲しさや寂しさが増す。」というように、知覚と照らし合わせた追究している記述が見られた。

③については、ある生徒は「メロディーは左で低音のベースを弾いていて、悪魔が追っている感じがして、右で高音で、細かい音（16分音符やグリッサンド）から悪魔から逃げているような、緊張感、恐怖が感じられる。左が右を追いかけているような感じがする。」という紹介文を書き上げた。この紹介文には1時間目のまとめに見られなかった「悪魔」ということに焦点を当て、さらに「心の高まり（緊張感）」だけではなく「恐怖」という言葉が加えられ、具体的に記述する姿を見ることができた。

3.2 実践2の成果

(1) 様々な「要素」を観点に追究し、感受に基づく批評を行う生徒の姿を見ることができた。

ピアノのみで演奏されているクラシック音楽を題材としたことで、紹介文において「要素」やそれに付随する音楽の専門用語やそれを類推させる言葉（以下「専門用語」とする）を用いた記述の平均個数は2.83個となった。8割を超える生徒が実践1より多くの観点で追究を行うことができた。

このように知覚の個数が増えたことに関連して、「緊張感、恐怖」ということについて、旋律、和音、音色、強弱それぞれを根拠に紹介文を書き上げる姿があり、複数の「要素」を観点に曲を聴き、それらと感受したことを関わらせた紹介文を書く生徒の姿があった。

曲のもつ雰囲気を1つの「要素」で語ることは難しく、それぞれの「要素」がどのような働きをしているのか知覚し、それらの働きや関わりが感受と結びつくことにより、感受したことがより具体的になり、感受に基づく批評へとつながることが見えてきた。これは、グループワークにおいて友との対話や、知覚と感受の関わりを分析する活動が進んでいるグループに「他の「要素」を観点に曲を聴いてみよう」と問いかけをしたことが有効にはたらし、「要素」や特徴に意識を向けた追究ができたと考えられる。「要素」に意識を向けた追究をしたことで、感受しただけの鑑賞ではなく、感受に基づく根拠のある批評を行うことができたのではないかと考える。

3.3 実践2の課題

(1) 改めて問いかけの仕方、支援のあり方について考えた。

「紹介文」において、知覚と感受の関わりの記述がない生徒もいた。「紹介文」としたことで、他者に向けて曲に対する興味・関心を引き立たせる内容を記述するという視点で記述したのではないかと考える。活動の意図や狙いを生徒と共有することができていないという課題が見えてきた。また、曲を聴いてワークシートに載せた「要素」以外の「専門用語」を曲の特徴と捉え、その「専門用語」のみで追究を行った生徒もいた。紹介文に「要素」を用いた記述はなく、曲の特徴として捉えた「不協和音」という「専門用語」のみ記述があった。友の感受した側面から、「どのような音楽の特徴からそう感じたのかな」などの問いかけの工夫によって、「不協和音」だけでなく、様々な観点で曲を聴き、初感以外の感受が発見され、知覚の側面も充実された追究にすることができたのではないかと考える。

4. 考察

鑑賞における感受に基づく批評について①初感を大切にすること②友との関わりによって見えてきた新たな感受でも曲を味わうこと③知覚と感受の関わりを追究する際には「要素」を用いること、の3点が欠かせないということが見えてきた。それは、友との関わりや音楽を繰り返し聴き、知覚と関わらせながら追究をしたことで初感が具体的になったり、新たな感受を見だし紹介文に用いたりする姿や「要素」を用いることで根拠が明確になり、曲に対する批評的な視点で紹介文を書き上げる姿を見ることができたからである。今回の実践では、初感を非常に重視して実践を行った。しかし、今回の実践を通して初感だけでなく、新たな感受を見だし、深めるためにも、「何度か曲を聴くことで、新たに感じたこと、魅力からも追究してみよう」などと声かけを行うことで、感受の側面が充実し、それに伴って知覚の側面も充実した批評を行うことができるのではないかと考えるようになった。感受したことを1つの「要素」で語ることは難しく「要素」を理解し、それらを普段の授業から生徒が会話や記述の中に用いることができるような指導を意識することで、1つの感受したことを複数の「要素」から語ることを可能にするということが見えてきた。「要素」それぞれの働きについて理解し、「要素」同士の関連についても批評を行うことができる生徒を育成することができるようこれからも研鑽していきたい。